

私の ICPT2008 (札幌開催の舗装国際会議) 顛末記

私が当所に配属された2005年8月に、いの一に上司に聞かされた話の一つが、3年後の2008年7月に札幌開催される ICPT2008でした。会議の事務方や論文発表をガンバレという趣旨と受け止めましたが、それまで在職1～2年でポストを転々としてきた経験から、正直3年後のことは実質後任の仕事になる位にしか気に留めませんでした。国際学術会議には出席したこともないし、実質主催者の土木学会舗装工学委員会の雰囲気も内容もわからない白紙の状態でした。ところが、3年の間様々な国際会議に出席し、適切な学習機会に恵まれ、さながらオリンピック出場の強化試合をこなすような流れで、十分に訓練を積み本会議の成功に貢献できたと思っています。結果的に、ICPT2008参加者から教えてもらった会議成功のキーワードは、ホスピタリティーです。

先ず、翌年の2006年3月には、前任者が投稿していた論文の発表を行うために PIARC 冬期会議トリノ大会に参加しました。トリノは前月に冬季オリンピックを開催したばかりでしたが、イタリアの観光地としてはインパクトが弱いので、コンベンションシティとしての街の活性化を目指していることがよくわかりました。同年8月には、舗装の国際会議では最も盛大で4年毎に開催の ISAP2006カンファレンスがケベック・シティで開催されました。幸運にも主催者からの招待で、プレカンファレンスにおけるセミナーで北海道におけるアスファルト舗装の低温クラックについて発表する機会を得ました。この2度の会議は、基本的な国際学術会議の運営について事前に学べる格好の機会となりました。意外だったのは、舗装の世界は未だに欧米先進国主体で、アジアも含めて開発途上国からの参加が極めて少ないことでした。また、会議参加者への印象度をよくするポイントは、食事とテクニカルツアーと見て取りました。

2007年7月は、隔年で相互開催される第4回日中舗装技術 WS が日本で開催され、開催地も札幌でした。この時の私の役割は、地元ということもあり、主に食事関係やテクニカルツアー等の責任者でした。翌年の ICPT 本番のシミュレーションと言える貴重なテスト機会でもありました。

2008年7月の ICPT は、海外の参加者に北海道をアピールすべく、北海道洞爺湖 G 8 サミット開催の2週間後ということで、12時間の日帰り強行ツアーを企画しました。札幌市内でアスファルト舗装リサイクルプラントの見学後に、洞爺湖回りで北海道電力(株)が京極町で建設中の揚水式発電所における貯水池表層のアスファルト遮水工事を見てもらいました。山頂の大規模な現場は好評で、フランス人は「フランスでは、高層ビルと橋梁工事以外は、このような大規模な工事現場は現在はない。」と語っていました。また、食事関係は爆発的に評価が高かったと思います。ブュッフエ形式の懇親会での乾杯の直後に、参加者が一斉に料理にダッシュしていた様子は滑稽でもありました。最終日には、海外の複数の方から「今回の会議はホスピタリティーが大変よかった。」旨の労いの言葉をいただきました。「また日本に来る」、「また会おう」という顔が並んでいました。

個人的にも、前年の日中 WS に引き続き参加してくれた韓国人やフランス人と一緒に飲んですっかり友人となりました。「近々北京に転勤になるので北京で会おう」、「ISAP2010名古屋で会おう」といった具合です。今回の参加者の多くが好印象で北海道を後にしたと確信しています。2年後の名古屋にも多くの同じ顔が集まり、北海道の思い出話が出るのを大変楽しみにしています。

(寒地道路保全チーム上席研究員 田高 淳)

* * * *

表紙左上記号 ISSN 1881-0497の説明

国際的なコード番号である ISSN (International Standard Serial Number : 国際標準逐次刊行物番号)は、ISSN ネットワークが管理する、逐次刊行物を識別するための固有の番号です。この番号は国立国会図書館 ISSN 日本センターから付与されたものです。